

# 産卵控えた ヤマメ放流

## 増殖や観光効果期待



渡良瀬川支流でヤマメを放流する関係者

### 県水産試験場

県水産試験場は、産卵期を迎えたヤマメを河川に放流して資源拡大を図る新たな増殖方法「親魚放流」の実証試験に乗りだす。親魚放流は稚魚や成魚の放流に比べて姿のきれいな野生魚が育つ上、河川での生存率が高いとされている。放流する場所によっては産卵する姿を観察できることから、将来的には教育や観光面での効果も期待できるといふ。8日には桐生市内の渡良瀬川支流に45匹を放流した。今後、産卵や稚魚の成育状況を継続調査する。

### 桐生・渡良瀬支流に45匹

日本釣振興会県支部が新たな魚増殖の在り方を検証するために資金を提供。両

毛漁業協同組合が産卵と調

査に適した河川を選んで協力した。

実証試験は上流と下流が小さな滝で分断され、魚が

移動しづらい約430坪の区間で行う。8、9月には川に生息していたヤマメ、イワナを電気ショックで気絶させて捕獲。いったん魚がない状態にして、放流したヤマメによる産卵が確認できる環境を整備した。

この日は県水産試験場の箱島養鱒センター(東吾妻町)で育てたヤマメの雄30匹、雌15匹を2カ所に分けて放流した。産卵が順調に進めば、11月上旬から中旬に発眼卵となり、12月上旬にかけてふ化する見通し。

県内ではこれまで、渓流釣りの解禁を控えた早春に稚魚や成魚を放流。一部で発眼卵の埋設や産卵床整備による増殖を行ってきたが、親魚放流の実績はほとんどない。両毛漁協が昨秋、渡良瀬川に産卵を控えたヤマメ約160匹を放流したもの、産卵やふ化の追跡調査までは行っていない。

県水産試験場は親魚放流に適した条件や増殖効果を検証することで、漁協による放流方法の選択肢を増やし、より良い釣り場環境の整備につなげたい考え。両毛漁協の中島淳志組合長は「親魚放流にはほかの放流方法にはない良さがあり、魚を増やす手段が増えることは魅力的な釣り場をつくる上でメリットがある」と強調する。

日本釣振興会県支部の粕瀬巖支部長は「稚魚放流した魚は河川での生存率が低く、費用対効果が悪いことが最近の研究で分かってきた。県水産試験場との共同研究でデータを蓄積し、将来的には親魚放流のノウハウを全国に発信したい」と話している。